



10月号

昭和58年10月1日
編集／発行
岡崎市教育委員会

朝の運動場
全員がいっせいに走り始める
静かな空気が熱風となる

一年生から続けた業前かけ足
「今日は七周走るぞ。」

負けるもんか
友達と競走し
先生と競走する
夏の日には苦しい
でも

みんなで走るの楽しい
記録がのびるのがうれしい

全身から噴き出す汗は
城南っ子の誇り



(業前かけ足 — 城南小)



書庫の中

深田 三太夫

一教育随想一

昨年家を改装した折に待望の書庫を作った。それまではいくつかの本箱に雑然と詰め込んであったので、読みたい時に読みたい本が引き出せないうらみがあつた。書庫のある生活は私の夢であつた。

かく言うとお変な読書家であつて蔵書家のように思われるかも知れないが、事実は他に趣味のないことも手伝つて、少少本が好きだけの話である。

大きさに「書庫」と呼んだが、幅一間、奥行二間半、三坪に足りない納戸のようなものである。その両側の壁に床から天井まで棚を作つて大雑把に分類した本を並べて見た。意外に入らないものである。

ぐるりと見回してみるに、我ながら碌な本はないな、と思う。もっともこういう言い方は、他人様の書かれた書物に対し不遜、不敬であるかも知れない。唯、専門書や稀覯本や高価な本は一切ないのである。

折々に気の向くままに買い求めた結果がこうなつたまでのことであるが、強いて挙げれば「漱石」のものが比較的多いのが特長である。

漱石文学との出会いは終戦直後にさかのぼる。戦災に家を焼かれて丸裸の仮住居の頃、戦後初めて出版された書物らしいものといえば、岩波の漱石全集であつたように記憶する。読書好きであつたおふくろがそれを買つてくれて、初めて手にした時のページの白さが目に滲みたとをいまだに忘れない。

「猫」や「坊っちゃん」は何べんも読み返したので表紙がボロボロになつて、棚の片隅におさまつてゐるが、今「猫」の奥付を見ると、昭和二十二年八月五日第一刷発行とあつて、定価は一六〇円である。当時大学卒の銀行の初任給が二二〇円（週刊朝日編・値段の風俗史に

よる）とあるから、食うのが精一杯であつた時代にしては、おふくろも随分思い切つた買い物をしたものである。

以来三十数年、漱石に関する書物は多少意識して求めてきた。現在、そんな本が二三〇冊ほど書庫の中が一番良い場所を占領している。但し、その中で読んだものは一割に満たないだろう。「読みもせぬ本を買つて来て……」と言うのが女房の言い分であるが、本人にして見れば、仕事を離れて暇ができたらゆつくり読んでやろうと先行投資の積もりである。

本を買つてくると、まず蔵書印を押す。それから購入年月日を記す。別に「買った本・読んだ本」という帳面がこしらえてあつて、それに著者や発行所やページ数や価格等を記録する。これでその本は正式に私の蔵書に加わるのであるが、すぐには読み始めない。一旦は書庫の仲間入りをさせるのである。

「本を読んだら、必ず読後感をお書きなさい。」と言うのが中学生時代のおふくろの教えであつたので、一冊読み終ると、帳面の「読んだ本」のページに感想を書きつけていたが、後でそれを読み返してみると、吹き出すか赤面するかいずれかなので、とうとう止めてしまつて今は読みつばなしである。

夕方家に帰つて書庫に入り、ぐるぐる首を回して本のタイトルを追つてゐると何とも満ち足りた気分である。書庫の中は私にとって心やすらぐ空間である。

（丸石醸造社長）



五つ教えて三つほめ

二つしかつてよい人に育てよ

愛宕小学校長

鳥居 尚

「かわいくば、五つ教えて、三つほめ二つしかつて、よい人に育てよ。」と言われていますが、ほめるのもしかるのも実際にむずかしいことだと思ひます。

家庭でも学校でも、子供のはげみになると考えてよくほめていますが、小さなことを過大にほめて、子供を甘やかす結果になつてはいませんか。ほめる価値のあることだけを適切にほめて、はじめて効果を挙げることが出来ます。

しかることはほめること以上にむずかしい。しかるなくてはいけない時に案外見のがしてしまつています。後から思い出してしまつたり、くどくどしつたりしても効果はありません。子供が先生にしかられたが、何でしかられたのかかわらないと言つてゐることがあります。

しかられる訳が本人によくわかつてゐること、そのことだけを短く、真剣にしかること、しかる基準を人によつて変えないことなどが心掛けたいことです。



石工五十四年

鈴木正一氏

石都岡崎を象徴する上佐々木町の石工団地の一角に、鈴木さんが勤めている永田石材問屋がある。鈴木さんは尋常小学校を卒業するとすぐに足助から岡崎の石屋に奉公した。昭和五年のことである。

「かすりの着物に信玄袋一つ持って家を出ました。それから五十四年たちますか。仕事は朝五時からで給料は二十銭。暗くなるとカンテラをつけてね。鼻の中が真っ黒になったもんです。」
白の半そでシャツと作業スボン姿の鈴木さんは小柄でもの静かな方である。「二十一歳で年季が明け、その後の一年間はお礼奉公でした。職人になると給

料は仕事次第で変わってくるので、やっぱり遅くまでやったもんです。」
機械が普及しはじめたのは昭和三十年ころからである。鈴木さんの若いころはたたきも磨きも手仕事であった。

「今思うと、あれだけのことを手でよくやったなあと思います。道具のみで作るのも石屋の仕事でした。かじ屋みたいだけど、焼き具合で自分の仕事がいまいくかどうか決まってきました。三日仕事をすれば一人前になれるかどうかわかりましたね。」

昔は「石工人生五十年」と言われ、確かに短命であった。

「よっぽどでないといけい肺でやられたもんです。わしは体は小さいけどまめな方でした。おかげでこの年（六十六歳）になっても働いています。同じころの者はほとんどいけい肺で倒れました。」

石工団地が造成された昭和四十年以前は、花崗町など市の中心部に石工業者が散在していた。中町に遊郭があったころ、「街を通るは女郎か石屋か」と言われるほど、顔が青白くなるまで働いたという。石製品業界も他の伝統的工芸品業界と同様に若年就業者の減少という問題を抱えている。今の若い人の働き振りをどう見られるか尋ねてみた。

「今はラジオをかけた話をしてたりして仕事をしているけど、昔はしゃべれなかった。無駄口はたたきません。中京と明石の対戦（高校野球）も聞かせました。」

それに休みが今のようにはなかったですよ。休みは月の一日と十五日の二日、それに盆と正月だけでした。月二回の休みもなかなか暇が出なかつたですわ。」

機械が入ってきたといっても、まだまだ手に頼らなければならぬ仕事がある。例えば石塔のかさ・玉・火袋のような丸い部分などである。

「石には目があるんです。目にそってやらないと字はおしやかになる。これを見つけないと字ができるようになれば、一人前ですよ。」

社長の永田寛さんは鈴木さんを「正ちゃん」と親しく呼んでいる。鈴木さんの振るつち音はまだまだ軽快である。

生年月日 大正6・11・23
住所 岡崎市上佐々木町菊田十九
職業 (株)永田石材問屋勤務・石工



三対二の割ですから、かなりしかるところがあることになりました。上手にほめ、上手にしかつて、先生の気持ちに心を通るようにしたいものです。

若い間違いや失敗の中から

—叱る・怒るについて—

常盤中学校長

畑中貫一

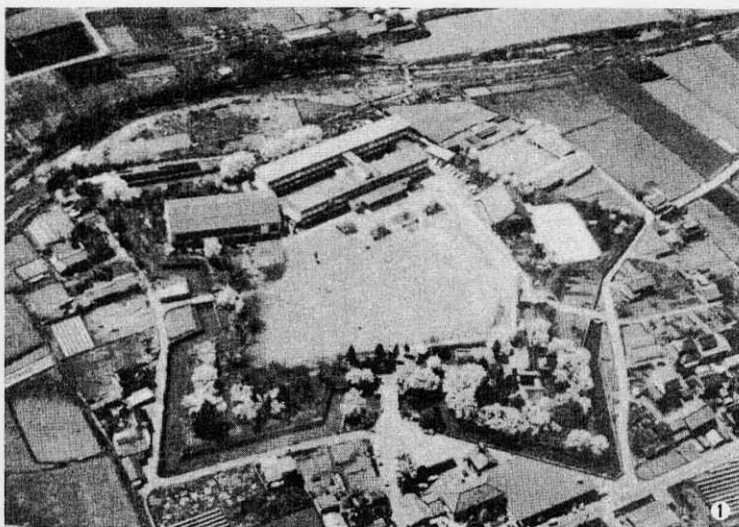
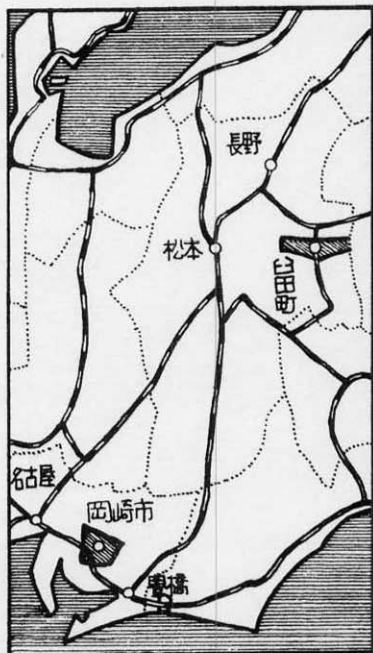
私にとって、叱る・怒るという所業は教師と呼ばれながら、全く恥と失敗の連続だけです。思い出す一つ一つが苦汁を飲む思いの記憶ばかり。今なお、体も焦げる程の悶えと悔恨と反省が続いています。そんな歳月の流れの中で、たどり着いた今は、懺悔贖罪の心で、叱るも怒るも、祈るのもいい、心しております。

叱るといふことは、おもに大脳新皮質前頭葉の興奮・抑制の領域作用に依存しており、怒るの方は、大脳辺縁系・脳幹の感覚受容器の興奮・抑制の機能に関与しているという説もあります。

叱る方は、論告検証的で、一つ誤ると冷酷にもなり、建前を軸に理屈小言に終始する。怒るは、直観本能的で、速く鋭く激して崩れ、怨念に沈みやすい。

だから、その偏りが怖いと恐れます。脳機能から申せば、人間の行為である為に、叱ると怒るは相互に連動して、抑制と興奮の調和をもって作用する時、滋味ある振舞いができる気がします。

そんな時、人間の反応を感じ、更に確実な自己観照へそれが還流してくる体験を、しきりと覚えるこのごろです。



白田町

ゆかりの町を訪ねて

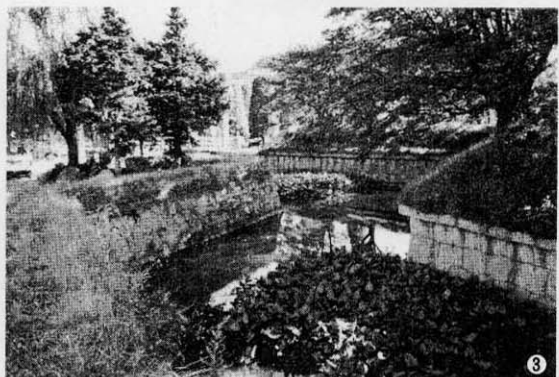
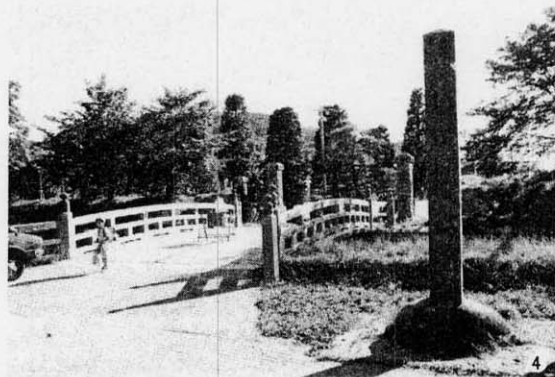
-その1-

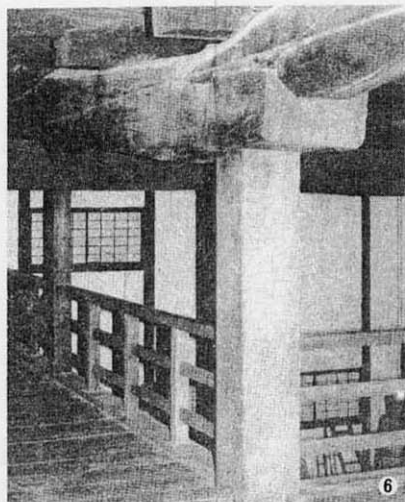
長野県東部、小諸から小海線で四十分ほど千曲川をさかのぼった所に白田町がある。夏休みも終わりの八月二十九日、編集子五名は岡崎市とゆかりの町提携をした、長野県上佐久郡白田町を訪ねた。佐久平はすでに秋。水田には見事な稲穂が出そろい、赤トンボが飛んでいた。ゆかりは、奥殿藩十一代藩主松平乗謨公が白田に移封されたところから生じる。乗謨公は幕末に陸軍局長となり、郷土の生んだ英傑である。文久三年（一八六三）、奥殿にあった陣屋を佐久一万二千石の中心地信州田野口（今の白田町田野口）に移し、竜岡藩と名を改め、フランス人の考案した洋式五稜郭「竜岡城」を築いた。

乗謨公は、維新後は名を大給恒と改め、新政府の賞勲局長として活躍するかたわら、博愛社（後の日本赤十字社）を佐野常民とともに創立し、自らは副社長として二十五年間、日本赤十字活動の礎を築いた。

竜岡城の建物は、維新の際、お台所以外はすべて民間に売却され、堀も土砂で埋め立てられてしまったが、その後、昭和八年に地元の方々の熱意と努力で堀が復元された。紅白のスイレンの花開く、星形をしたお堀と、大手橋、お台所の建物が往時を偲ばせている。

（次号は白田町の教育と産業の予定）

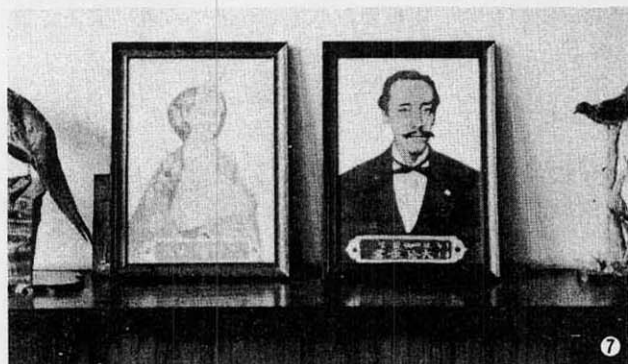




6



5



7

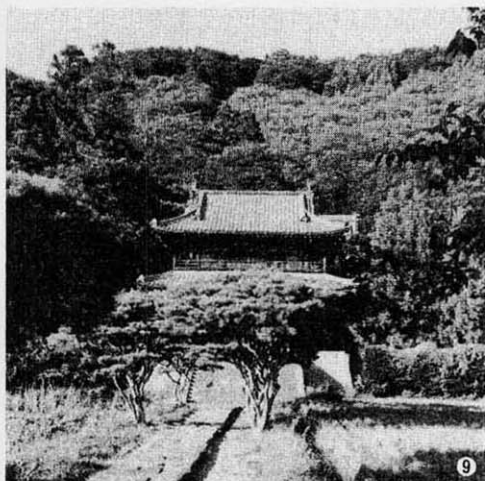


8



10

- ① 上空から見た春の竜岡城五陵郭。(白田町提供)
- ② 白田駅に建つ案内板。
- ③ 星形をした堀の石垣。地元の石を寸分の隙間なく積み重ねた石垣には武者返しもつけられている。しかし、藩の財政難からか、裏半分は乱石積みで堀もない。
- ④ 城の大手橋。城跡には町立白田小学校が建っている。
- ⑤ 今も残るお台所の建物。こればかりは大きすぎて買手がなかった。昭和三十年代まで中学校が使用していた。
- ⑥ 建物の内部。けやきの大木が巧妙に組み合わされて、大地震にもびくともしない。二条城を模したという。
- ⑦ 新婚当時の大給公夫妻肖像(白田小学校蔵)
- ⑧ 白田小学校に残る大給恒公の筆跡。
- ⑨ 大給家菩提寺番松院。代々の遺牌がまつられている。本堂の見事な欄間。奥に近江八景の透し彫りもある。
- ⑩



9

昨日の我に厭く

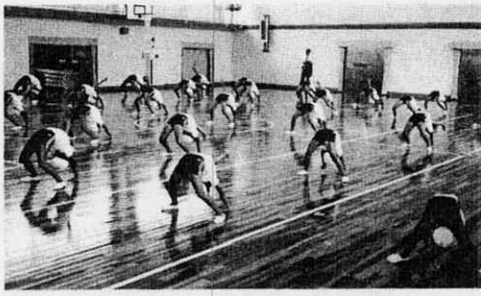
秦梨小 上田 光

「どうして、途中でやめるんだ。」
「もうちょっとなのに、なんであきらめちゃうの。」
「できるできる。がんばれ。」

Kを中心に、三、四人の男子が、ブリッジの練習をしている。Tを励ましている。

私の学校では、柔軟体操に力を入れているのだが、その程度は千差万別。体質にもよるのだろうが、特に男子の中に体の固い者が多い。

ブリッジとは、直立の姿勢から後屈して、地面の両手足で体



を支える。半孤になってそのままでの姿勢から再び起き上がる。かなり高度だが、五年生当初は二人の子供ができなかった。

ところがその中の一人、Kは五月に入ってからできるようになり、T一人が残った。

私は「一人だけになったなあ。毎日練習するか。」

と、話しかけた。Tは無言で、ぼろぼろと涙をこぼした。その肩に見る悲しさは、何とも不憫だった。

ブリッジのできない原因は体が固い、腹筋と腕の力、腰の力の弱いことだと見た。

一からやり直しである。腕立て伏せ、廊下の壁を頼りの後屈練習、立て膝から起き上がりの練習に逆戻りして、それを着実にやらせた。

ブリッジのときの補助方法も頭を支えることにとどめた。

六月十六日、朝の運動の時である。補助する手を拒んで、私の目の前で堂々とブリッジをやったのである。

「やった。よくやった。」と、私は彼の背中を何度も叩いた。彼も照れていたが、できた喜びを体いっぱい表していた。

それ以後の彼は、自信がつい

て来たせいか、生活にも張りが出て、何事にも意欲的で、積極的な行動が見られるようになって来た。

「継続は力なり」の本校の目標が実証されたでき事であった。しかし、それは、昨日の我に厭く姿勢でない力にはならないということ、Tから私は教わったのである。

教育日々



信じて待つ

矢作中 木船 京子

水泳大会の朝、Tが水着を忘れた。というより持って来なかった。運動神経のよい彼は個人メドレーの選手になっていた。

「選手なのにどうして持って来ないの。」
「泳ぎたくない。」
「どうしてなの。」
「いいじゃん。」

意外な答だった。急病を装ったのがれようとする生徒より正

直ではあるが、このまま黙ってTのわがままを認めるわけにはいかない。

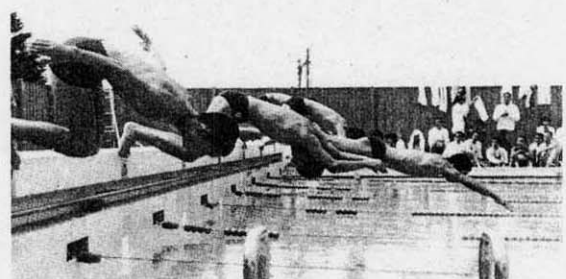
全員参加が原則である。この日のためにプール開放に足しげく通って練習に励んだ者も何人かいる。泳ぎが苦手な生徒はだれもが苦痛なのである。それを乗り越えクラスのためにがんばろうとしているのだ。

開会までにはまだ十五分程あった。Tを説得してすぐ家まで取りに行かせることにした。しぶしぶ教室を出て行く彼の後ろ姿を見送る私の脳裏を一抹の不安がよぎった。

人一倍他人の言動を気にするTは、級友の冗談でさえ深刻に受けとめ、落ち込んでしまうことがある。新学期を迎えたばかりのある日、ささいなことからきげんをこわして授業をエスケープしたばかりである。果たして彼はもどってくるだろうか。

プールサイドでは開会式が始まった。かれこれ三十分が過ぎようとしている。彼の足なら十分往復できる時間なのにまだ現れない。ひょっとして事故では。やはり、このまま帰って来ないのでは。

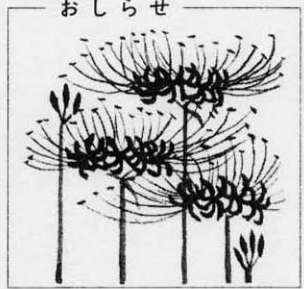
第一レースのアナウンスが流れる。いてもたってもいられない



い気持ちである。彼を一人で帰したのは失敗だったのか。ところが、彼は裏切らなかつた。数分後更衣室の入り口に現われたのである。うれしかった。「早かったね。しっかりがんばってよ。」

心から声援を送った。

責任を果たすということ、集団の中でわがままは許されないというところが、彼の心にしっかり刻み付けられたことだろう。私自身、日ごろ生徒たちに対し疑うことの多かった自分を取りかえり、信じて待つ勇氣をいつも持っていたいと思つた。



おしらせ

第四回 岡崎市中学生海外都市親善使節

四名の生徒がアメリカ訪問

未来の岡崎を背負う生徒に夢と希望を持たせ、都市交流・文化交流の礎とするため、今年も四名の中学生が、アメリカ西海岸を訪問することになった。

メンバーは、村上博幸君(矢作中) 杉本哲一君(河合中) 三浦玲子さん(甲山中) 越智麻紀さん(香山中)、いずれも中学生三年生。付き添いとして、関原克之教諭(南中) 市川修教諭(城北中)が同行する。

今年、ホームステイが三日間に増えたのが特色で、よりいっそう交流が深められるものと期待される。

主な日程は次の通り。
十月十二日(水) 東京発
十三日(木) サンフランシスコ

十四日(金) シスコ

- 【寄贈刊行物・資料等】
- ◆昭和57年度研究集録 第15集 B5五〇ページ 技・家部会
- ◆児童・生徒会活動 特活部 B5 孔版印刷
- ◆授業―構造と展開と―広幡小 B5 二九ページ
- ◆気づき考え実行する生徒の育

- 成 B6二八ページ 香山中
- ◆香山の自然と文化 香山中 B6 二〇七ページ
- ◆見つめ見ぬく力を育てる学習指導 B5 二七七ページ 連尺小
- ◆言語環境を整える 第三集 B5 六五ページ 矢作北小

- ◆標 竜美丘小 A5 一六四ページ
- ◆ダリマナ 竜中 太田一弘 A5 二二二ページ
- ◆歩みし道の標 中西光夫 B5 四二二ページ上製本
- ◆岡崎の文化No.6 岡崎文化協会 B5 二六〇ページ

た。世界の子どものたちの作品が、こうした形で展示されることはめずらしく、連日、大変なにごわいであった。

なお、「海外の教科書の中のニッポン展」も併催された。外国の教科書に日本がどのように紹介されているかが一目でわかり、これまた好評であった。

- 十五日(土) ロサンゼルス
- 十月十六日(日) ロサンゼルス
- 十月十七日(月) ニューポート
- 十月十八日(火) ニューポート
- 十月十九日(水) ビーチ
- 十月二十日(木) ロサンゼルス
- 十月二十日(金) 東京着

- ◆世界児童美術展 おかざき世界子ども美術博物館着工を記念して「世界児童美術展」が、去る九月二十一日から二十五日まで岡崎市美術館で開催された。
- ◆柴田君(美川中) 全国大会で三位入賞

この美術展に応募された作品は二九、〇七四点、そのうち外国からは二、二九八点が含まれた。駐日各国大使を含めた三回にわたる審査の結果、入賞した作品一、二九〇点が展示され

- 今年度の全国大会へは、陸上競技九種目、水泳競技六種目、女子バレーボール(福岡中)が出場した。上位入賞は次のようであった。
- 陸上競技 男子 一一〇Mハードル 三位 柴田 訓(美川中)
- 水泳競技 男子 四〇〇Mリレー

- ◆健康優良児童・生徒 九月七日、実地審査の結果、次の児童・生徒が選ばれた。
- 小学校の部 岡崎一 羽根 寺沢 益実 根石 星野 晶子 矢作東 山本 学 井田 黒沢 聡 矢作南 中野 真理 六美北 畔柳 幸子

- 中学校の部 岡崎一 美川 藤田 浩司 葵 岡田 幸子 準岡崎一 甲山 井沢 晋 東海 杉浦 義規 岩津 松島小夜子 六美北 村山みどり
- ◆後期教育実習 十月三日から後期教育実習が行われる。受け入れ校及び実習生の数は次の通り。
 - ▽根石小 七名▽羽根小 八名
 - ▽広幡小 七名▽男川小 七名
 - ▽竜谷小 二名▽奥殿小 二名
 - ▽矢北小 六名▽矢西小 四名
 - ▽六北小 七名▽常磐中 三名
 - ▽岩津中 九名▽梅園幼 六名
 - ▽広幡幼 五名▽矢作幼 四名
- ◆研究発表会期日変更 十月七日に予定されていた緑丘小学校の「感動ある授業の創造」をテーマにした研究発表会は一月二十日に変更された。
- ◆吹奏楽で竜美丘小が金賞 去る八月十四日蒲都市で開かれた県吹奏楽祭で、竜美丘は小学校の部で金賞を受賞した。来る十一月三日長野市で開かれる第二回小学校バンドフェスティバルに出場する。



所在地一岡崎市小美町

板倉勝重公生誕地

小美と保母とを結ぶ橋だから、

『美保橋』であるという。この橋の北、小美の信号から南へ、本通りを右にそして田んぼ道を進むと、右手の新しい家の庭に次のような石碑が建っている。

『板倉勝重公生誕地』

『徳川の重臣、駿府町奉行江戸町奉行などを経て京都所司代、天文十四乙巳年小美町上屋敷に生る。』

昭和四十六年三月青山佐市

奥方に、まない（礼物）を一切受け取るなど命じると、名奉行として高名な勝重公。菩提寺である西尾の長円寺の方が有名であるが、生誕地である小美でも「板倉さん」「板倉の殿

さん」と呼ばれ親しまれている。

ここに、今住んでおられる酒井さんが家を建てる以前は川石を積み上げた石垣と屋敷跡があった。碑を建てた青山佐市さんは、八十歳を越すお年で、今もかくしやくとして山畑を耕していらつしやる。町の人々が勝重公のことをよく知っているのも、青山さんのまめな啓蒙のおかげである。

小美町の瓶井神社は勝重公の創建であるという。板倉家には勝重公末裔に大名に列したものが四家系。子孫繁栄の礎になった勝重公の教えは、「まず無欲なれ」であった。心すべきことばではなからうか。

●カ
ツ
ト
矢作中

山田泉美

この本を

- * 愛と祈りを 瀬戸内寂聴 980円
小学館
- * 子どもからみた親の条件 田村 健二 930円
高橋書店
- * 君の心が戦争を起こす 羽仁 五郎 680円
光文社
- * 子どもに生きる喜びを 大町 正 850円
筑摩書房
- * 意識革命のすすめ 広岡 達朗 980円
講談社
- * 先生と生徒の人間関係 ハイム・G・ギノット 1,300円
サイマル出版会
- * 日本人の質問 ドナルド・キーン 880円
朝日新聞社(選書)
- * 医者と患者と病院と 砂原 茂一 430円
岩波書店(新書)
- * 表現における近代 大岡 信 1,800円
—文学・芸術論集—
岩波書店
- * 歴史を動かした発明 平田 寛 編著 530円
—小さな技術史事典—
岩波書店(ジュニア新書)

「教える」ということは、教材との出

合いを通して子供を変えらるることである。動的な活動を大胆に取り込むと、教材の消化と学習管理の取捨がつかなくなるという危惧が先立って、授業の構想が貧弱になっていまいかを恐れる。子供を変えらるには、まず教師の自己変革の努力から。実りの秋でありたい。

「自信をつけるということとは、

自分の意志で行動し、ぶつかつて失敗したりしながら、そこを乗り越えたときにつかんでいく」(山田洋次)
容赦ない子どもとのぶつかり合いが見られなくなっている自分、避けて通ろうとしている自分。だから迷いや不安が生まれる。技術以前の何かを忘れている。



秋風がさわやかに校庭を吹きぬけていく。リズム、組立体操、リレーと、元気な子どもたちが活躍した運動会も無事終了した。
次は文化祭。展覧会、発表会の準備でまた、充実した毎日が始まる。
行事が、「祭」で終わらないように心がけたいものである。

過ぎた歴史が、思いがけなくも身近に感じられることがある。

長野県南佐久郡臼田町と聞いても、何の感興も催さなかったのが、「ゆかりの町」のいわれを知れば、古い知己のように思われるから不思議だ。知は愛なり。龍岡城五稜郭は、澄んだ秋空のもと静かに坐し、松籟の音は深く胸にしむ。